

立命館小学校 2021年度 学校目標 年度末報告シート

区分	A. 課題(上位目標)	B. 目標 (中位目標)	C. 達成目標 (当年度目標)	D. 自己評価	E. 具体的施策 (どのような方法で)		
教育目標	以下の三点を育成児童像とする ① 五つの誓いを体現する子ども ② 自立的な学習者・生活者としての自分に肯定感を持ち、自分の成長に期待と希望を抱く子ども ③ グローバルな視野での人権と社会貢献に対する高い意識を持ち、利他の心を実践する子ども		中期目標 ① 目指す姿の素養をもった児童の安定的な獲得 ② 知的好奇心に導かれる自主的な学びの構築 ③ 子どもたちと社会をつなげる「ハブ」機能の充実 ④ 心理的安全性の高い組織づくり ⑤ 新たな時代の12年一貫教育に向けての小中高連携				
	Ⅰ	目指す姿の素養をもった児童の安定的な獲得	1 教育活動の価値の掘り起こしと学校内での相互理解・外部発信を通じた広報の充実 2 (1) 学校内外での入試イベントを充実させる (2) HPやSNSでの情報発信を充実させる	◎ ◎	① 校内における説明会、体験教室や学校探検などのイベントを、オンライン実施も含め全9回開催し、延べ約1100家庭の参加を得た。 ② 校外における説明会や講演会を、オンラインも含め26回開催し、約200家庭の参加を得た ③ パンフレット製作は行わず、ポストカードや情報誌にQRコードを掲載し、そこからHPやSNS(Facebook, Instagram, LINE等)にアクセスして頂くWeb誘導型の広報を行った。 ④ 学校ポスターを折り畳み式にし、校外イベントで配布した。裏面は本校の教育活動の紹介するイラストベースにし、親子で楽しめる内容とした。		
教学課題	Ⅱ	知的好奇心に導かれる自主的な学びの構築	1 立命館小学校版「探究学習」モデルの確立 教科横断型探究プロジェクト	(1) 各学年における教科横断型探究学習の実施 (2) 探究WGによる2025年度新カリキュラムへの協議 (3) 探究型学習に相応しい評価方法の開発	◎ ◎ ○	① 全学年において、教科横断型の探究学習の取り組みをおこなった。また、その成果について校内研修で共有した。 ② 探究WGにおいて、他校の先進例の調査や校内の取り組み事例の分析を通じ、新カリキュラムへの議論を重ねた。	
			2 グローバル教育新展開 国際クラス構想と世界との協働学習の日常化	(1) 交流プログラムのオンライン実施 (2) 交流校の新規開拓 (3) 国際クラス(仮)構想に向けた調査の実施	◎ ○ ○		① 従来の対面型交流プログラム(派遣・受け入れ)をオンラインに置き換え、全ての学年においてオンライン交流イベントを開催した。 ② World Weekをオンラインで開催した。 ③ 国際クラス(仮)構想に向けての調査として、他校の先進例を視察した。
				Ⅲ	子どもたちと社会をつなげる「ハブ」機能の充実		
	2 教育ベンチャー事業の挑戦：立命館小学校がプロデュースする学びの場の提供	(1) アフタースクールの外部委託化 (2) EARTH構想の具体化と試行	◎ ○			① 2022年度より、金曜日の枠を「プライマリータイム」とし、完全外部委託を行うこととした。 ② EARTH構想の一つである「りっつひろば」の試行を企画したが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で休止した。	
	Ⅰ	心理的安全性の高い組織づくり	1 教職員・児童の心身の健康を重視した組織づくり	(1) 日常的な負荷の削減の検討	◎		① 「心とからだ支援室」を立ち上げ、保健主事がコーディネータとなって保健室業務や学習支援、カウンセリングなどを有機的に繋ぎ、学校全体での児童支援体制を強化した。 ② 長時間勤務を是正するため、KOTIによる勤務管理を安定的に行うとともに、衛生委員会を毎月開催して各教員の労働時間について詳細に検討した。 ③ 業務改善のため、昨年度に導入した学年教員のサポートをするGS(グレードサポート)制度や補助的作業を担うSSS(スクール・サポート・スタッフ)制度の運用を継続するとともに、その成果に基づき、2022年度においてSSSを増員することとした。
				(2) 長時間労働の是正に向けた業務改善の実施	○		
2 ダイバーシティ&インクルージョンの推進を軸とした新しい組織文化づくり			(1) 多様性尊重についての理解促進 (2) 特別支援体制の構築	◎ ○	① 「ダイバーシティ&インクルージョン」を学校経営方針の一つの軸とした。 ② 全校集会や立命科の授業において「多様性」「ダイバーシティ&インクルージョン」について考えを深めるとともに、制服や呼称のあり方についてジェンダー差を是正するための取り組みをおこなった。 ③ 「心とからだ支援室」が中心となって、立命館小学校における特別支援のあり方について検討し、課題を明らかにした。		
Ⅱ	新たな時代の12年一貫教育に向けての小中高連携	1 立命館中高との連携強化と12年一貫教育の実質化	(1) R12部長会議の安定的な運営	◎		① 小学校と中高の校長・副校長・教頭・事務長が出席するR12部長会議を全16回開催し、児童・生徒状況について具体的な情報交換を行ったり、セカンドステージ説明会を合同で企画するなど、連携を深めた。 ② 5・6年生の長岡京登校の内容と小中の共同で企画・運営した。 ③ 4年生保護者向けセカンドステージ説明会を、初めて長岡京キャンパスで開催した。	
			(2) 小中高連携イベントの充実	◎			
			(3) 児童・生徒の成長に関わるデータ共有と政策化	○			

達成状況	<p>2021年度も、2020年度に引き続き、新型コロナ禍に対応しながらの一年となった。「教職員・児童の安全を守る」ことと「できる限り児童にとって実りある学校生活を提供する」ことについて、学校全体で最善を尽くしてきた。年度の目標については、概ね達成できた。とりわけ、以下の点の特筆できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナ禍にありながら、オンラインと対面での広報活動をそれぞれに工夫し、質量ともに向上させることで、より多くの児童と保護者が本校の特徴をよく理解し、入学を希望して下さることとなった。 ・探究学習については、研究部の主導により、すべての学年で実施し、その成果を校内で共有することができ、2025年度の新カリキュラム構築に向けての大きなステップとなった。 ・新型コロナによってすべての対面型国際交流がストップしているが、オンラインでの代替プログラムを実施することで、児童と教職員がICTを活用して世界とつながる手法を身につけた。 ・「心とからだ支援室」を立ち上げることで、関係箇所が有機的につながりながら、児童支援を充実させる基盤を作ることができた。 	
改善策	<p>今後の課題として明らかとなったのは以下の点である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・探究型の学びを促進する上で、児童の成長を新たな学力観をもって評価するための仕組みを構築する。 ・新型コロナの動向を見据えながら、安全を確保しつつもできるだけ早く海外渡航を伴うプログラムを再開させる。 ・長時間労働の是正に向けて、教員一人ひとりの工夫による業務改善は一定達成されたため、次の段階として構造的な改革を検討する。 ・立命館小学校における特別支援のあり方について、立命館中高及び立命館大学との連携の中であるべき形を模索する。 ・12年一貫教育+大学での4年間において、児童・生徒・学生がどのように学び成長しているのか、改めてデータに基づいた分析を行う。 	
学校関係者評価に関する事項	委員会の構成	岡野益巳氏(岡野組)、小栗栖元徳氏(御霊神社・白雲神社宮司)、平林幸子(京都中央信用金庫相談役)、中川哲氏(株式会社EdLog代表取締役社長・文部科学省初等中等教育局視学委員)、泉浩一氏(元立命館小学校保護者会会長)
	委員会開催日程 主な議題	<p>日時:2021年7月13日13:30-15:30 場所:立命館小学校 ハウス活動室+オンライン 議題:2020年度の立命館小学校の自己評価について、2021年度の立命館小学校の学校目標について * 会議に先立ち、委員による校内見学を行った。</p>
	評価、改善事項	<p>全体としては前向きな評価をいただいた。とりわけ学校見学においては、子どもたちが明るく活気のある様子で過ごしていることについて評価をいただいた。改善のための意見として以下のコメントをいただいております。今後の学校運営に活かしたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校活動の魅力をもっと保護者や外部に理解してもらえるよう、発信を強化してほしい。 ・働き方改革を学校で進めるのは苦労も多いことがわかるが、ぜひしっかり進めてほしい。 ・EdTechの活用については公立学校でもこれから進んでくると思われるが、立命館小学校では先進的に取り組んできた経験の蓄積から、さらに前進してほしい。